

五感で感じる木材講座の開発

—素養の獲得をめざして—

森と木のクリエイター科2年 木工専攻 久保 遼一

1. 研究背景と目的

私は、卒業後に京都の銘木屋「千本銘木商会」に勤めることが決まっている。現在の千本銘木商会の仕事の多くは、材木屋や工務店が相手の BtoB の商売である。しかし、木材産業の不振が続く現代において、今後銘木を売っていくためには、エンドユーザーとなる一般の人々に、その価値について知ってもらう必要があるのではないかと考えた。

その時、中川専務が仰っていた「素養」という言葉が印象に残った。この「素養」とは、身の回りにあるモノの素材に対して、普段の暮らしの中から身につけている教養である。一般の人々が持つ、木材に対する「素養」を高めれば銘木の価値が再認識されるのではないかと考えた。

そこで、木材の樹種ごとの違いを、五感をもとに肌で感じる木材講座を企画・実践し、木材に対する「素養」を獲得するきっかけとなる場を作ることとした。

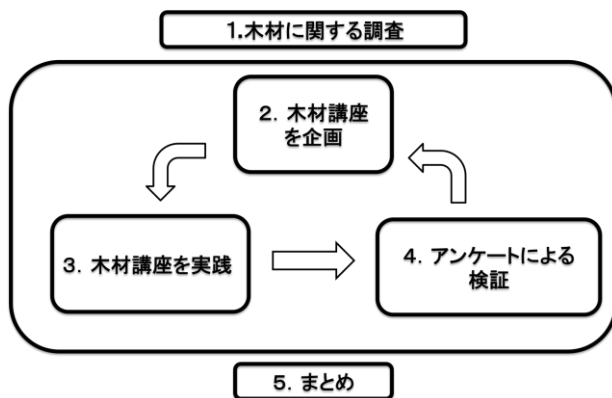


図1. 研究の流れ

2. 調査

研究を進めていく上で、木を扱う上での知識や技術、およびに樹種ごとの特徴などについて知るため、2つの手法を用いての調査を行った。

① 文献調査

- ・ 「森の形 森の仕事」
- ・ 「森の博物館」
- ・ 「木材大辞典 170 種」

② 「材木屋」への聞き取り調査

- ・ 千本銘木商会（京都市）・伊藤製材（山県市）
- ・ カネモク（高山市）

材木屋は、直接的にエンドユーザー（一般の人々）に対して働きかけることが少ない現状があることがわかった。一方で、（当然のことながら）材木屋さんは木材に対する「素養」が極めて高い。本研究を通して彼らのもつ知識を一般の人々へと伝えていくことも必要であると感じた。

3. 実践

調査結果を反映し、木材の違いを「五感」を使って体感してもらえよう講座を企画・実践することとした。その手法として、本研究では二つのアプローチ（対話によるアプローチ・つくるアプローチ）による検証を計7回行った。



対話によるアプローチ

五感による感覚的な理解と同時に、会話の中から木材の特徴やそれを生かした使われ方を説明しながら木材への知識的な理解を参加者に促した。実践を繰り返していく中で、講座をアップデートしていくこととした。

ここでは、五感のうち本研究で有効である「視覚」「嗅覚」「触覚」を扱った。その時々テーマに即した材種のサンプルと、その樹種で作られる代表的なアイテムを展示し、無作為に選んだ相手を対象に講座を行った。

場所：①令和元年揖斐川町谷汲緑地公園

「揖斐すめらぎの森感謝祭」（1回）

②森林文化アカデミー

「松楓祭」（1回）

③ぎふメディアコスモス2F

岐阜市立中央図書館（3回） 計5回

対象：大人

参加者の主な感想

- ・「こんなに色々な樹種の木を同時に見たのは初めて。同じ木でもこんなに色や特徴が違うとは知らなかった。」
- ・「今まで、ヒノキの匂いが木の匂いだと思っていたが、樹種の違いで全く香りに違いがみられた。」
- ・「家で使っているまな板が何の樹種か知りたくなった。」

以上の感想から、木材の樹種ごとの違いへの気づきや、これまでとは違った視点で木材をみようとする声などが聞かれた。

また、アンケートへの回答者にお礼として渡していた三樹種の木タイルのアクセサリーを渡した際、その樹種について尋ねてくる参加者が多くいたことが印象的であった。

つくるアプローチ

樹種の違いを生かしたアイテムを考え、作るワークショップを企画・実践する。見た目の色の違いを体感できるような教材を開発し、参加者が自らの手で作りながら体感できる場づくりを目指す。また、制作中に参加者との対話を通して、知識的な理解にもつなげていく。

場所：①豊橋駅前広場

「いちにち骨董マルシェ」(1回)

②みのかも健康の森

「みのかもりマーケット」(1回) 計2回



教材「モザイクコースター」

4 樹種の木材をタイルの形に木取ったものを、各種4つずつ使って、参加者に自分の好きなように並べてもらう。裏板に接着し、紙やすりを使って形を整え、オイル塗装し、完成。

参加者の主な感想

・「ヤスリで削っていて、樹種ごとの硬さの違いが体感できた。ホオノキは比較的削りやすく、加工性がいいという意味がわかった。」

・「木といえば茶色のイメージがあったから、着色してるのかと思った。特にホオノキの色に驚いた。」

以上の感想から、対話の中で説明したホオノキの「適材適所」についての話とWSでの体験を結びつけている様子が伺えたのが印象的であった。また、異なる樹種を並べることで色の違いの印象を強くし、樹種の違いをより印象付けることができた。

4. 研究結果

計47名の参加者にアンケートによる検証を行った。WS冒頭に「木製品についてどのような樹種の木が使われているか意識したことがあるかどうか」を質問したところ、実に半数近くが「いいえ」と回答。

しかしWS終了後、「『適材適所』という考え方ははじめ、木材の樹種ごとの違いについてより知りたいと思ったか。」という問いに対して、その内の約9割は肯定的な反応を見せた。

今回の私の目的であった、参加者の「素養」を獲得するきっかけとして本WSが効果的であったとともに、それに対して意欲的な反応が見られる結果となった。

5. まとめ

今回の研究を行う中で特に感じたのは、一般の人々の木材に対する関心はある程度高いにも関わらず、木材やそれにまつわる文化について知ることのできる場が不足していることで、一般の人々が木材に対する「素養」を深めるきっかけが損なわれているということであった。そういう意味で、今回のように木材の文化や歴史に触れるきっかけとなる講座を開催することは、有用であることが明らかになった。

6. 今後の展望

課題研究を通じて、今後も木材の文化や歴史を一般の人々に向けて発信していく取り組みを行っていきたい。例えば、京都の銘木屋の一員として仕事をこなしながら、ゆくゆくは建築士、大工、彫刻家など木に携わる人々に声かけをして、一般向けのセミナーを開催してみたいと考えている。今後も、木材を扱うプロとしてその素養を深め、一流の銘木師を目指していきたい。